

大学新入生における人格適応の変遷と

大学教育・学生相談の課題；社会心理学的接近¹

On the Transitions of Personal Adjustment in University Freshmen and Some Problems for University Education or Counseling Service ; A Sociopsychological Approach

豊 嶋 秋 彦²・芳 野 晴 男³

清 俊 夫⁴・細 川 徹⁵

I 問題と方法

I-1 新研究プロジェクト・「大学生の適応構造と適応過程の予測因に関する追跡的研究」の目的

大学生の適応の全体像を把握するには、大学社会や学生文化、ひいては大社会が顕在・潜在的にもつ学生への役割期待などに対する学生の社会適応の側面からのアプローチと、逆に、学生生活の中で主たる行動空間を学生がどのように生活空間構造を体制化していき、生活空間諸領域をどのように評価し諸領域で自我支持されているのかといった、大学生活における人格適応の側面からのアプローチとを統合しつつ、かつ、大数的調査研究と個別事例研究の、単なる並列を超えた統合と、更に追跡研究及びコホート分析を加味した研究が必要となる。しかしこれまでかかる要件を具備した研究は存在しなかった。青年期後期人口の1/3を占める大学生の研究は、星野(1984)の言う“青年心理学の近年の不振と低迷”以前の未明の状態におかれていると言えよう¹⁾。そして我々が昭和52年度から昭和55年度迄の弘前大学入学生を対象に遂行してきた大数的・追跡的・コホート分析的研究(豊嶋ほか 1979, 1980, 1981, 1982, 1983 a・b, 豊嶋 1981, 1985, 清ほか 1984)も、社会適応の側面は捨象し個別事例研究との結合も試みられなかった点で不十分なものであった。そこで我々は昭和59年度から61年度までの弘前大学入学生を3つの対象コホートとする新しい追跡的研究プロジェクトを開始した。ここでは、これまでの一連の調査研究で調査時点として選定してきた1年次三時点と4年次一時点²⁾とに加え2年・3年次の人格適応の状況も把握³⁾しながら、①各調査時点の人格適応の構造と、先行調査時点の生活体制や生活空間構造が

1. 本研究は昭和59年度文部省科学研究費補助金(一般C-59510040)による研究プロジェクトの成果の一部である。本稿のII-3章の一部は第18回全国学生相談研究会議(1985)で豊嶋によって報告された。またII-3章の考察は第16~18回同研究会議の討論から触発されたものが多く、同会議会員・参加者の諸氏に感謝する。

2. 保健管理センター・カウンセリング部門

3. 教養部心理学科

4. 教育学部発達心理学教室

5. 東北大学医学部リハビリテーション医学研究施設

後続時点の全体的な人格適応に及ぼす影響、いわば予測的な関連要因とを解明すること、②かかる人格適応の構造と大学における社会適応との関連性を探索すること、③大学生の大学における社会化の過程と型を明らかにすること、④昭和52年度から55年度までの入学生に対するこれまでの資料と比較することを通して、国公立大学における入学者選抜制度の激変（昭和54年度）とその定着、高等学校における教育課程の変容（昭和57年度、従って、昭和60年度の大学現役入学生がその初年度大学生となる）といった高校期・受験期における制度変容に伴う、大学生の適応状況の変容を跡づけること、が究極的な目的となる。この際我々は、これまでの一連の研究で欠落していた大学に対する社会適応（特に、成績を指標とする）の側面との関連も追求し、加えて、典型的な適応過程を見せる事例への半構造化された面接による事例研究をも展開することによって、統合的で、「全体像」に迫りうる研究を展望しているものであり、更に、目的①に関しては前回プロジェクトに基く仮説を検証するという方向性も目指される。

I-2 本研究の目的と方法

目的：本研究では、叙上の新研究プロジェクトの第1年目に入学した59年度入学生（Cohort-59：以下C-59）の入学直後時点における人格適応の状況と、旧プロジェクトでえた旧入試制度下の学生及び新入試制度導入期の学生の同時点における人格適応の状況とを比較することによって、新入試制度の定着した時代における大学新入生の適応の特質を探ることを第1の目的とする。これは新研究プロジェクトの目的④に対応するとともに、大学における社会化の開始時点での“student inputs”（Astin, A. W. 1970）の特質を定位するという意味で新研究プロジェクトの目的③にも対応するものであるが、それにとどまらず、入試制度の改訂に平行して学生文化にいかなる変容が生じたのかを大数的・実証的に解明するという意味をも担う。かかる学生文化の変容のデータを、前回プロジェクト第1報（豊嶋ほか 1979）のようなノーマティブ・スタディ⁴⁾と結合することによって、学生文化に対する学生の文化適応・文化非適応を判定するための客観的基準が与えられ、更に、学生の主観的な文化（非）適応感・社会（非）適応感の発生要因を理解する枠組が与えられることにもなるであろう。

本研究の第2の目的は、かかる特質をもつ学生を対象とした学生相談・厚生補導・大学教育にとっての課題を検討することである。かかる応用技術学乃至は応用社会心理学的考察のためには、「どこに向けての応用か？」という、目標としての価値の確定が必要となる（安倍 1969 豊嶋ほか 1978）が、ここではそれを人格の発達・成長と措定しておきたい⁵⁾。従って本研究の第2の目的を換言すると、学生の発達課題の達成や自己実現にとっての問題点もしくは阻害要因を新入試制度の定着期における学生の人格適応の状況からまず探り出し、次に、それらを解決するために大学や学生相談機関がとりうる指導・援助の方途を検討することである。

対象コホート：旧入試制度の下での入学生のサンプルとして昭和52年度生（以下、C-52）が選ばれた。やはり旧制度下の入学生であった昭和53年度生は、特に入学直後データに関して、他の年度生よりも著しく適応的であり、54年度から導入される新制度の以前に「かけこみ」入学を果たせた成功感に基くと解され（豊嶋 1980）、旧制度下のサンプルとしては不適切なために、C-52

表1. 有効資料数

	学 部 別					性 別			計
	人 文	教 育	理	医	農	男	女	不 明	
C-52	127 (69)	276 (82)	126 (76)	103 (84)	60 (44)	435 (67)	257 (86)	0	692 (72.8)
C-54	151 (64)	310 (84)	103 (64)	70 (58)	88 (65)	456 (63)	263 (87)	3	722 (70.8)
C-55	170 (63)	321 (87)	99 (62)	71 (59)	100 (74)	516 (68)	254 (82)	1	771 (72.6)
C-59	203 (69)	305 (82)	122 (76)	73 (61)	96 (71)	494 (69)	305 (85)	0	799 (74.0)

()は入学者への%

が選ばれたのである。新入試制度導入期のサンプルとしては、昭和54年度生（以下、C-54）と昭和55年度生（以下、C-55）の2つが選ばれた。しかし両コホートの間には、新制度導入直後と1年後という時間差があり、この間で高校期の進学進路指導システムにも、学生の大学観や学生生活観にも変容が生じたと推定できるし、事実、両コホートの入学直後データには人格適応上の差異が認められている（豊嶋 1984 b）。そのため、両年度生のデータは一括せずに年度毎に独立させて取扱われる。

なお、ここで使用された4コホートはいずれも、昭和57年度に改訂された高等学校教育課程によらない、旧課程の高校卒業生という点で共通している。

データ収集方法：データ収集は質問紙法による。質問紙は、高校期の生活体制と進学進路決定過程とに対する回顧的評価、入学後の所属満足感、人生指針確立（探索）行動への関与度、教養部期の主要行動空間への係わり意欲や生活体制、卒業進路展望など、入学直後時点での学生の生活空間構造を把えるべく構成された。昭和59年度の質問紙については、付一質問項目一覧を参照されたい⁶⁾。4対象コホートとも、各年度の入学直後・4月開講第一週目に教養部心理学講義の時間中に調査を実施した。有効資料数は表1の通りである。

分析方法：質問紙は昭和52年度以来数次の改訂を経てきたが、今回はC-59の特質を比較によって探るという観点から59年度まで引き継がれてきた質問項目に注目し、C-52とC-59の比較から旧入試制度下の学生と対比した新制度定着期の学生像を探り、C-54・C-55とC-59の比較から新制度導入期と比べた定着期の学生像を探る⁷⁾。評定項目（すべて五段階評定。最も適応的・積極的な評語から最も非適応的・消極的評語までを等間隔のscale上に付し、前者の反応に1点、後者の反応に5点、中間の反応に3点を与える）への反応は平均値比較（t検定）により、選択式又は自由記述式項目への反応については、各反応カテゴリ一度数の χ^2 検定（df=1）による。

また、前回の研究プロジェクト以来一貫して分析の際の基準変数としている総括的適応感(total feeling of summarized adjustment, SA と略称。付一資料の項目番号24の設問に対する五段階評定得点が測度)と、生活空間諸領域に対する関与度との間の関連性がどう変容したかを検討するために、SA と他の五段階評定項目得点との相関係数が4コホート間で比較される。

II 結果・考察

II-1 入試制度定着期における適応の特質—入試制度の変動前及び直後との比較による—

表2・表3にC-59とC-52、C-54及びC-55との間の比較結果を示した。以下(1)では、C-59・C-52間で差の見出された反応に注目して、旧入試制度下の学生と比べた新制度定着期の学生の人格適応における特質を述べ、(2)ではC-59とC-54及びC-55の比較から、新制度導入期と比べた定着期の学生の人格適応の特質を指摘する。

(1) 旧入試制度下の学生との比較から

高校期の生活体制：表3⑧「自我中核的活動⁹⁾」にみる通り、「クラブ活動」「交友」「人生観・読書」といったインフォーマル領域の活動では「不全感(力を入れたかったがやれなかった事)」は減少し、更に、前二者では「最も力(最も力をいれた事)」,即ち最も自我中核的 ego-nuclear に定位した者の増大が見られる。これに対して「学業自体」は「最も力」「不全感」「義務的(やりたくなかったがやらざるをえなかった事)」の全てでC-52に比べ著しく減少し、かわって「受験準備活動」は「最も力」「不全感」の双方で増加が認められた。高校生活全体を回顧しての満足感・「高校生活満足感」(表2②)はC-59がより良好な水準を示す。

以上からC-59の高校生活はC-52と比べ次の特質をもつと言えよう。インフォーマルな行動領域での不全感は弱まり、交友や人生観探索行動などの自我中核化が見出される。学業は生活空間構造内で周辺化しつつ抵抗感も弱化した「軽い」領域に化している。かくて高校生活全体への満足感が強まるのであろう。その一方で、受験準備活動はより中核化し、それへの不全感も強まり、いわば「重い」領域に化している。とはいえこの重さによっても高校生活満足感や「余裕感」(表2①)は低下をみせないのである。

進学進路決定過程と所属満足感：大学進学目的に関しては、その「明確度」(表2⑨)は不変だが、進学目的の内容では「職業・資格」志向(表3①)が強まっている⁹⁾。また、当初志望学部・学科の志望動機(同③)としても、「現所属選択動機」(同④)としても「職業・資格」重視型が増える。更に、「卒後志望進路」(同⑤)でも「大学院進学」が減じ「就職」が著しい増大をみせる。次に、「当初志望動機」における「適性」に関するカテゴリー⁹⁾と「現所属選択動機」における「性格・適性」「やりたいことがやれそう」とでの増加から、《専攻・適性》重視の強まりを推測できる。更に「学力」による現所属選択も著しい増大を示す。反面、「家から近い」や「まちにひかれて」「とくになし」は減少した(以上、表3④)。

要するに、現所属はより明確な動機で選択され、家族や街(地域性)といった、所属とは本来的な関連性の薄い大学側からすれば周縁的 peripheral な条件はより軽視され、〈共通一次得点〉であり受験産業の提供する〈偏差値〉を意味するであろう「学力」による規制と、職業・資格志向、専攻への興味一適性重視という要因から進学進路が決定される傾向が強まったのである。

加えて、「当初志望」(表3②)の通り、現所属を第一志望で選んだ者が増大し、「所属満足感」

(表2⑩～⑬)は全て好転し、「地域満足感」(同⑭)も改善するに到る。

人生観・生き方の探索行動：既述のように高校期の人生観探索行動はより自我中核化したし、調査時点現在までの「生き方・人生指針を考える時間」「確立感」(表2⑮⑯)も向上した。しかし「自我中核的活動・1年次」(表3⑩)の「人生観・読書」は逆に顕著な減少を呈する。つまり、C-59は入学以前の段階で生き方や人生観をより考え確立度を上昇させているものの、積極的モラリアムが可能な期間として、しかも専攻学業からのモラトリアム期として設定されている教養部期にはそれらを再探索・深化する行動を放棄または自我周辺化する傾向を強めていると解される。

現在の生活体制と大学生活への期待・展望：既に見た所属満足感の改善・人生指針確立感の向上とともに「SA」と「今後の全体的適応予想」(表2⑲⑳)も改善をみせ、C-59のトータルな人格適応は高水準を示す。教養部期の学生生活に関しても、「講義への期待」「出席意欲」(表2㉑㉒)に見る通り講義への意欲は強まり、更に、学生生活のインフォーマルな局面への意欲についても「サークル関与意欲」「友人獲得意欲」(同㉓㉔)の双方ともに向上したと見做せるから、学生生活のフォーマル・インフォーマル両局面への意欲が高まったと言えよう。

しかし、「展望—1年次(1年次での『最も力』)」における「学業」(表3⑩)は不変だから、講義への意欲こそ高まったが1年次の講義や学業が自我中核化したわけではない。むしろ、学業を自我中核的に位置づけるのは学部に移籍後の目標であると把える層が増大したことが、「自我中核的活動—学部期」(同⑩)における「就職+学業¹⁰⁾」の増加からうかがえるのである。また、「出席・試験」は「1年次」「学部期」いずれでも減少しており、それらを自我中核的に追求しようとする層が減ったことを示している。即ち、講義への意欲こそ高まったものの、総体的にみると講義領域の自我中核性は逆に低下したと言える。

これに対してインフォーマルな局面については、教養部期に「クラブ・寮活動」等の自治的集団活動や「交友」を自我中核的に追求しようとする者は増え(同⑩)、それらへの意欲が高まっただけでなくインフォーマル領域総体の自我中核性も強まったと言えよう。とはいえ、「学部期」のインフォーマルな諸活動への展望(同⑩)ではC-52と差が認められない。

要するに、〈教養部期=インフォーマルな活動の追求時期〉〈学部期=フォーマルな活動(学業)の時期〉というように、学年段階に応じて追求目標を変えていく『わりきり』(豊嶋ほか 1981)傾向が強まっているのである。

(2) 新入試制度導入期の学生との比較から

ここでは、C-54対C-59、C-55対C-59の二つの比較によって新制度導入期の学生と比較したC-59の適応の特質がまとめられる。但し、双方の比較結果が異なる方向性を示す場合には、後者が重視される。というのはC-54には変容直後の受験制度への適応が迫られ、それ故独特な適応パターン(外的要請への過剰な適応)をもつと示唆されるからである(Toyoshima et al. 1984)。

高校期の生活体制：高校期のフォーマル・インフォーマルな主要活動に対する関与度は、「受験活動」以外全てC-54より強まっており、C-54よりも全般に関与度の強いC-55の水準を維持している(表2③～⑧)。これらの活動の高校期生活空間構造における自我中核性を「自我中核的活動」(表3⑧)でみてみよう。「受験準備活動」では『最も力』『義務的』いずれもC-54やC-55

表2 評定項目への反応(平均値)の比較結果¹⁾ -t-test-

項目番号 ²⁾	項目名称	C-52 (昭和52年度生)			C-54 (昭和54年度生)			C-55 (昭和55年度生)							
		n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD	n	\bar{x}	SD					
①	8-1)	高校 受 験 期 へ の 回 顧	全体的余裕感			686	2.67	1.12	721	2.54	1.07	769	2.60	1.09	
②	2)		全体的満足感			682	2.76	1.17	721	2.65	1.18	769	2.60	1.11	
③	3-1)	関 与 の 回 顧	受 験 活 動			×			718	2.68	1.08	770	2.60	1.08	
④	2)		学 業 自 体			×			714	2.79	.99	769	2.74	1.03	
⑤	3)		クラブ・クラス活動			×			715	2.92	1.36	771	2.77	1.35	
⑥	4)		交 友			×			716	2.21	.92	768	2.12	.91	
⑦	5)		人 生 観 確 立			×			718	2.77	1.07	765	2.62	1.08	
⑧	6)		遊 び			×			717	2.60	1.02	767	2.49	1.04	
⑨	1-1)		大学進学目的の明確度			×			711	2.10	1.08	760	2.10	1.12	
⑩	15-1)	所 属 満 足 感	大 学			687	2.57	1.07	719	2.45	.98	769	2.46	1.01	
⑪	2)		学 部			690	2.30	1.09	719	2.14	1.00	769	2.05	1.03	
⑫	3)		学 科			640	2.45	1.17	686	2.33	1.09	742	2.23	1.10	
⑬	4)		転学(部・科)志向			688	2.30	1.28	721	2.08	1.22	771	2.08	1.27	
⑭	17	地 域 へ の 満 足 感			689	2.85	1.01	717	2.80	1.03	769	2.77	1.00		
⑮	9	生 き 方 ・ 人 生 指 針	考 え る 時 間			691	2.53	.99	721	2.54	1.04	771	2.51	1.07	
⑯	10		確 立 感			691	3.21	1.08	718	3.27	1.11	770	3.08	1.24	
⑰	10補		生 活 の 肯 定 度			×			245	2.99	1.07	349	2.99	1.02	
⑱	23	生 き が い ・ 充 実 感			×			×			768	2.93	.99		
⑲	24	総 括 的 適 応 感 (SA)			690	2.73	.96	721	2.46	.91	767	2.54	.92		
⑳	25	教 養 部 期 へ の 期 待 展 望	学 業 一 般 へ の 意 欲			×			718	1.83	.83	767	1.80	.85	
㉑	26		対 講 義	期 待 感			685	3.22	.92	721	2.95	.96	769	2.84	.91
㉒	27			学 力 へ の 自 信			681	2.64	.91	710	2.58	.79	745	2.48	.83
㉓	28			出 席 意 欲			688	1.81	.80	719	1.68	.80	769	1.61	.76
㉔	29		専 門 準 備 意 欲			×			714	2.42	1.14	769	2.38	1.05	
㉕	30		対 教 官 交 流 意 欲			685	2.20	.87	721	2.31	.91	768	2.22	.94	
㉖	31		サークル関与意欲 (同) ³⁾			×			720	2.23	1.08	768	2.10	1.10	
㉗	32-1)		友 人 獲 得 意 欲	巾			1.65	.88		720	1.69	.92	770	1.60	.90
㉘	2)			積 極 度			×			720	1.89	.93	768	1.74	.98
㉙	36-1)		下 宿 寮	交 流 意 欲			×			569	2.03	.90	593	1.99	.90
㉚	2)	適 応 予 想			×			×			595	2.19	.92		
㉛	35-1)	対 家 族	交 流 意 欲			×			715	2.08	.87	766	2.09	.91	
㉜	2)		適 応 予 想			×			×			767	2.03	.88	
㉝	39	全 体 的 適 応 予 想			684	2.69	.70	718	2.34	.65	770	2.42	.63		
㉞	40	卒 後 進 路 明 確 度			×			717	2.38	1.25	769	2.44	1.31		

注 1. 平均値(\bar{x})は高得点ほど非適応的・消極的反応になる。×は当該項目を設問せず。

2. ○外の数字は「付一資料」の項目番号に対応させたもの。

3. C-54からscale上の評語を一部改訂したが、C-54に限り旧来の評語によっても二重設問してある

4. - p > .10, * p < .10, ** p < .05, *** p < .01.

(+)は適応的・積極的方向へ, (-)は非適応的・消極的方向への変化。

C-59 (昭和59年度生)			比較 -t値- ⁴		
n	\bar{x}	SD	C-52 : C-59	C-54 : C-59	C-55 : C-59
796	2.69	1.03	—	2.75** (-)	—
799	2.47	1.13	4.87***(+)	3.06** (+)	2.25* (+)
799	2.60	1.09	/	—	—
798	2.69	1.04	/	1.83* (+)	—
796	2.72	1.36	/	2.87** (+)	—
792	2.09	.92	/	2.57* (+)	—
789	2.57	1.04	/	3.78***(+)	—
797	2.48	1.04	/	2.32* (+)	—
794	2.02	1.06	/	—	—
799	2.46	1.05	2.03* (+)	—	—
799	1.99	1.02	5.69***(+)	2.91** (+)	—
786	2.16	1.11	4.74***(+)	2.90** (+)	—
798	2.17	1.28	1.85 ^o (+)	—	—
792	2.76	1.05	1.70 ^o (+)	—	—
799	2.44	.99	1.71 ^o (+)	1.88 ^o (+)	—
799	3.11	1.16	1.66 ^o (+)	2.68** (+)	—
385	3.10	1.04	/	—	—
797	2.84	1.05	/	/	1.77* (+)
792	2.60	.90	2.77** (+)	2.92** (-)	—
798	1.77	.81	/	—	—
798	2.73	.88	10.39***(+)	4.61***(+)	2.47* (+)
784	2.61	.80	—	—	3.02** (-)
797	1.56	.75	6.14***(+)	2.95** (+)	—
798	2.22	1.04	/	3.55***(+)	3.03** (+)
799	2.18	.94	—	2.64** (+)	—
798	1.96	1.09	/	4.83***(+)	2.57* (+)
	.79		/		—
797	1.41	.92	5.55***(+)	6.38***(+)	4.50***(+)
797	1.71	.93	/	3.86***(+)	—
629	1.97	.89	/	—	—
627	2.03	.90	/	/	3.21** (+)
797	2.08	.90	/	—	—
797	2.01	.85	/	/	—
798	2.32	.62	10.74***(+)	—	3.07** (+)
797	2.37	1.30	/	—	—

表3 選択式・自由記述式項目への反応の比較結果¹ — χ^2 -test—

項目・カテゴリ ²		C-52 n=692	C-54 n=722	C-55 n=771	C-59 n=799	比較 — χ^2 値 ³			
						C-52 : C-59	C-54 : C-59	C-55 : C-59	
①	進学目的	職業・資格	33.7%	37.1%	37.7%	43.8%	↑	7.03** (+)	5.97* (+)
② 当 初 志 望 先	大 学	弘 前 大 学	10.5	22.4	20.2	21.3	31.28***(+)	—	—
		旧 1 期 校	48.0	36.6	36.5	32.7	36.29***(-)	—	—
		他 の 国 公 立 大	14.5	15.7	25.0	29.2	46.26***(+)	39.39***(+)	3.38* (+)
	学 部	現 所 属 と 同 じ	47.8	54.1	58.9	69.5	71.95***(+)	38.45***(+)	19.12***(+)
		同 系	35.8	27.1	23.6	19.9	47.47***(-)	11.13***(-)	3.17* (-)
	異 系	5.3	7.2	9.0	6.1	—	—	4.48* (-)	
学 科	現 所 属 と 同 じ	30.9	30.1	36.3	46.9	39.77***(+)	45.44***(+)	18.19***(+)	
	同 系	28.6	34.6	29.6	29.4	—	4.75* (-)	—	
③ 当 初 志 望 の 動 機	学 部	職 業 ・ 資 格	23.8	28.5	31.5	35.2	↑	7.68***(+)	—
		(志 望 専 功 あり) (+ 適 性)	37.5	43.7	45.8	50.6	↑	5.41* (+)	—
	学 科	職 業 ・ 資 格	9.8	18.4	16.9	22.5	↑	3.91* (+)	7.95** (+)
		適 性	38.9	25.2	44.2	50.8	↑	104.86***(+)	6.82** (+)
④ 現 所 属 選 択 動 機	職 業 ・ 資 格		30.3	36.1	47.0	49.7	57.47***(+)	28.32***(+)	—
	学 力 を 考 え て		75.0	73.1	75.2	84.6	21.50***(+)	30.27***(+)	21.57***(+)
	性 格 ・ 適 性		19.4	15.0	27.6	23.7	4.02* (+)	18.25***(+)	3.25* (-)
	や り た い 事 が や れ そ う		15.0	20.5	28.4	31.7	56.35***(+)	24.36***(+)	—
	家 から 近 い		36.4	37.4	31.5	30.4	6.03* (-)	8.27** (-)	—
	ま ち に ひ か れ て		16.2	13.9	11.7	9.0	17.64***(-)	8.86** (-)	—
と く に な し		9.7	7.2	8.0	2.6	33.22***(-)	17.37***(-)	22.96***(-)	
⑤ 卒 後 志 望 路	大 学 院 進 学		23.7	16.9	17.3	19.4	4.08* (-)	—	—
	就 職		53.8	67.5	67.8	71.5	50.02***(+)	2.88* (+)	—
	未 定		21.4	13.2	12.7	7.8	56.91***(-)	11.94***(-)	10.51***(+)
⑥ 自 我 中 核 的 の 準 拠 集 団	家 族		×	16.8	20.9	20.4	/	3.31* (+)	—
	高 校 期 の 友 人		×	36.0	28.9	(40.3)	/	2.81* (+)	22.11***(+)
	大 学 で の 友 人	ク ラ ブ	×	3.5	6.1	(14.9)	/	56.69***(+)	32.04***(+)
		ク ラ ブ 外	×	23.3	25.9	(8.9)	/	55.97***(-)	77.50***(-)
計		×	26.7	32.0	(23.8)	/	—	13.11***(-)	
⑦ 準 拠 集 団 で の 中 核 的 活 動	学 業		×	10.2	3.8	9.1	/	—	18.66***(+)
	対 人 関 係 自 体		×	×	35.0	39.9	/	—	4.03* (+)
	ク ラ ブ 活 動 自 体		×	16.3	11.4	9.9	/	14.02***(-)	—
	(遊 び + 趣 味)		×	21.6	10.2	12.4	/	23.09***(-)	—
⑧ 自 我 中 核 的 活 動	受 験 準 備 活 動	最 も 力	5.9	15.0	10.0	8.9	4.68* (+)	13.47***(-)	—
		不 全 感	2.9	4.0	5.3	4.9	3.86* (+)	—	—
		義 務 的	15.2	34.9	23.4	16.2	—	71.08***(-)	12.87***(-)
	学 業 自 体	最 も 力	18.5	11.9	10.9	9.8	23.76***(-)	—	—
		不 全 感	25.1	11.6	13.1	16.4	17.44***(-)	7.08** (+)	3.38* (+)
		義 務 的	23.8	23.1	14.7	17.3	9.89** (-)	8.12** (-)	—

自我中核的 活動望	⑧ 高 校 期	ク ラ ブ 活 動	最も力	27.3	20.4	21.0	26.4	—	77.71** (+)	6.31* (+)
			不全感	24.6	20.1	13.6	11.0	47.60***(-)	24.05***(-)	—
	交 友	最も力	10.5	17.3	10.5	13.7	3.31* (+)	3.93* (-)	3.63* (+)	
		不全感	7.2	4.4	4.2	2.5	18.48***(-)	4.27* (-)	3.32* (-)	
	人 生 観	最も力	3.2	6.2	5.1	4.9	22.73* (+)	—	—	
		不全感	4.9	6.9	4.0	2.8	4.79* (-)	14.64***(-)	—	
	(なし + NA)	最も力	×	14.8	28.7	24.3	/	21.38***(+)	3.88* (-)	
		不全感	×	29.3	39.7	43.9		34.52***(+)	2.90* (+)	
		義務的	×	34.8	54.8	59.0		87.93***(+)	2.84* (+)	
	⑨ 現 在	(学業+出席行動)		×	11.2	6.4	6.3	/	11.86***(-)	—
		交 友		×	13.2	10.0	10.0		3.69* (-)	—
		人 生 観・読 書		×	6.4	5.2	3.3		8.17** (-)	3.64* (-)
(なし + NA)		×	31.5	51.5	49.1	48.79***(+)	—			
⑩ 展 望	1 年 次	出 席・試 験	20.8	18.0	11.8	11.0	27.08***(-)	15.10***(-)	—	
		学 業	31.1	18.6	37.4	31.4	—	33.15***(+)	6.14* (-)	
		ク ラ ブ ・ 寮 活 動	5.6	6.0	6.1	10.1	10.16***(+)	8.86** (+)	8.56** (+)	
		交 友	9.5	15.0	11.0	16.2	14.24***(+)	—	8.74** (+)	
		人 生 観 ・ 読 書	12.1	10.0	4.0	4.0	34.19***(-)	21.20***(-)	—	
		(なし+NA)	×	18.8	22.2	16.7	/	—	7.69** (-)	
		(就職+学業)	60.1	62.9	57.8	67.6		8.99** (+)	3.71* (+)	15.93***(+)
⑪ 学 部 期	出 席・試 験	5.6	5.8	3.8	1.9	15.01***(-)	16.32***(-)	5.11* (-)		
	(なし+NA)	×	21.7	33.5	20.8	/	—	39.26***(-)		

- 注 1. 主要な反応のうち差の見出されたものを表示した。×は当該年度は設問しなかった項目、又は、当該年度は採用しなかった分類カテゴリー。
2. (+)は合成カテゴリー。
3. †…C-52では自由記述項目、他では選択式項目のため統計的には比較できないことを示す。- $p > .10$, * $p < .10$, ** $p < .05$, *** $p < .01$, **** $p < .001$ 。(+)は増加, (-)は減少。
4. C-59で新たに「異性の友人」という選択肢を加えた。()の数値は、新選択肢の反応数を減じた数で除した%。

に比べて減り、『不全感』こそ強まったものの受験活動の自我中核性は低下し受験からの圧迫感も弱まったと解される。「学業自体」の『最も力』は変わらず『義務的』でC-54に比べた減少、『不全感』でC-54・C-55 双方に比べた増大が見出され、高校期の学業自体への関与度は強まったとはいえその自我中核性の程度は変わらずむしろ不全感が強まったことになる。「クラブ活動」は『最も力』で増加、『不全感』で減少、「交友」は『最も力』でC-54より減ったがC-55よりも増え、『不全感』はC-54より減少をみせる。また「人生観・読書」も『不全感』でC-54に比べた減少が見られた。従って高校期のインフォーマルな活動領域では関与度が全般に上昇したのみならず、自我中核化過程が進行しており、しかも、そこでの不全感・やり残し感も弱まったと言えよう。他方『最も力』の「なし+NA」はC-55より減ったもののC-54のレベルを上回っており、高校期における主要な諸活動への関与度が全般に強まったといっても、自我中核的活動を特定で

きない層、あるいは生活空間構造の中核部を欠いた層も C-54 より増えているのである。

「なし+NA」の『不全感』『義務的』は C-54 以降次第に増大し、高校生活全体での切迫感ややり残し感を感じている層は減ったと見られ、「高校生活満足感」(表 2 ②)も改善している。

要するに C-59 は C-54 又は C-55 と比べ、受験準備活動の占める比重が小さくなり、その他の主要諸活動への関与度が強まっている。しかし学業はより自我中核化しているわけではなく、むしろインフォーマル局面の活動の自我中核性が進行しているのであり、併行して、自我中核的領域を欠く(あるいは不鮮明な)層が C-54 に比べ増大しているのである。受験の比重の弱まり、自我中核化したインフォーマル領域からの支え、不全感や圧迫感を与えた活動がなしとする者の増大、などから高校生活全体への満足感が向上したと解される。但し「余裕感」(表 2 ④)は上記の諸傾向、とりわけ受験から圧迫感の減少にもかかわらず低下している。

進学進路決定過程と所属満足感：表 3 の「①進学目的」「③当初志望の動機—学部」「同一学科」「④現所属選択動機」のいずれにおいても「職業・資格」重視による志望先選択者の増大が見られ、「⑤卒後志望進路—就職」も増加を呈する。旧制度下と比べ〈職業・資格〉志向が強まっていたと見做せる新制度導入期の学生よりも一層、〈職業・資格〉志向が進路決定過程を強く規制している。また、前節での指摘と同様に、〈専攻・適性〉重視の強まりも、周縁的条件の軽視傾向の強まりも読みとれ、学力による規制もより強く感じるに至っている。

かかる要因で選択された現所属は、学部・学科ともに第一志望での選択者が増え、C-54 又は C-55 で一旦増大をみせた同系や異系¹¹⁾の学部・学科からの志望がえ層が減少して(表 3 ②)、かくて「学部」「学科」への「満足感」(表 2 ⑪⑫)は向上する。但し「大学満足感」(同⑩)「当初志望大学—弘前大学」(表 3 ②)でコホート間差は認められず、むしろ、「他の国公立大学」からの鞍更え者が増大した。

要するに、旧入試制度下の学生との比較においてあらわれたとほぼ同様の特質がここでも見出されたことになる。但し、旧制度下と比べれば好転していた大学及び地域への満足感は、ここでは同一水準を維持するから〈弘前〉大学への満足感乃至は受容度が新制度の定着に伴って高まっている、とはいえない。

人生観・生き方の探索行動：「高校期の関与度—人生観確立」「生き方を考える時間」「確立感」(表 2 ⑦⑮⑯)のいずれも、特に C-54 より向上をみせ、入学以前に既に人生観・生き方を定めてしまう傾向が強まったと言え、このことは「高校期の自我中核的活動—人生観・読書」(表 3 ⑧)における『不全感』の減少からも傍証をえられよう。反面、「自我中核的活動—現在」と「展望」(表 3 ⑨⑩)は入学後の再探索・深化意欲の低下を示唆する。前節でも指摘した特徴が、特に C-54 との比較において一層明確にあらわれている。

現在の生活体制と大学生活への期待・展望：所属満足感は前述の通り全般に改善しているが、「SA」(表 2 ⑰)は低下する。しかし SA の関連指標である「生きがい・充実感」「今後の全体的適応予想」(表 2 ⑱⑳)は C-55 に比べ向上しているから、トータルな人格適応の低下は強いものとは言えない。

フォーマル局面への係わりでは、「学力への自信」こそ C-55 よりも低下しているが、「講義へ

の期待」「出席意欲」「専門準備意欲」の全てで改善をみせ(表2⑳～㉔)更に、「対教官交流意欲」(同㉕)も向上する。即ち、講義や教官、そして将来の専攻学業といったフォーマル局面への係わり意欲は強まったと言えよう。しかしそれらが自我中核化しているかどうかは、主に現在・教養部・学部期という時間水準のちがいに依りて異なってくる。即ち「準拠集団での中核的活動」や「現在」から「学部期」に至る「自我中核的活動」での学業・出席に関するカテゴリーにおける推移(表3⑦⑨～⑪)から次のような像がえられる。第1に、出席や単位取得し試験に関してはその自我中核性は現在・教養部・学部いずれの時間水準でも低下した。だが、第2に、学業に関しては、現在での自我中核性は低下した¹²⁾が、教養部1年間への将来展望ではC-54における自我中核性の低下から回復し(但しC-55に比べれば依然低い)、学部期の展望では明確に自我中核化している¹⁰⁾のである。

大学生生活のインフォーマルな局面に関しては、「サークル関与意欲」(表2㉖)が強まり、「自我中核的準拠集団」や「自我中核的活動—展望・1年次」(表3⑥⑩)をクラブ集団やそこでの自治的集団活動に置く者も増大をみせるが、他方、「準拠集団での中核的活動」(同⑦)をみると「クラブ活動自体」は減少を示し、「対人関係自体」が増加する。従ってクラブやサークルへの意欲もその自我中核性も強まっているとはいっても、その焦点は活動それ自体ではなくそこでの対人関係にあることがわかる。このことを「友人獲得意欲」の二項目(表2㉗㉘)における改善や、「展望—1年次」(表3⑩)の「交友」におけるC-55での減少からの回復と併せると、生活空間構造のインフォーマルな諸領域の中で特に友人関係の領域の比重が大きくなったとまとめられよう。

しかし「自我中核的準拠集団」(表3⑥)においては「クラブ以外」の大学の友人を現在自我中核的に位置づけている者は減少しており、また「自我中核的活動—現在」(同⑨)の「交友」も減少を見せる。従って、少なくとも入学直後の時点に関しては、大学における友人関係や交友一般はむしろ自我周辺化しつつあると言える。そしてクラブでの人間関係とともに「家族」や「高校期の友人」といった旧来の人間関係が自我中核化しているのである。

他方、「自我中核的活動—現在」(同⑨)では「なし+NA」が増え半数に達している。それに対して「1年次」及び「学部期」への展望では「なし+NA」はC-55よりも減少、C-54の水準に戻っている。ここから、現在に関しては生活の中核を占める活動が発見できない傾向が強まり、逆に、将来への展望に関しては何らかの中核部を定めようとする構えが回復してきたと見られる。

以上要するに入学直後現在の生活体制と将来の自我中核的活動への展望とに関する特質をまとめると、〈入学直後＝中核的活動を定位しない時期〉〈教養部＝交友を中心としたインフォーマル活動の追求の時期〉〈学部＝学業の時期〉というように、大学生生活の展開段階にあわせて主体的課題をかえていく『わりきり』の構えが依然見出されると言えよう。

II-2 入試制度定着期における適応の特質—総合的考察

前章では、旧入試制度下との比較と、新制度導入との比較とからC-59の特質をそれぞれに指摘したが、本章では各項目・反応におけるC-52からC-59までの推移の経過(表4, 5)も参照

表4 コホート間の推移の概略 — 評定項目 —

項目番号	項目名称		推移の概略				項目番号	項目名称		推移の概略					
			年	度	5	52				54	55	59	年	度	5
①	高校→受験期への回顧	全体的余裕感	↗				⑲	総合的適応感(SA)		↗					
②		全体的満足感	↗				⑳	教養部への期待・展望	学業一般への意欲	× ↘					
③		関与度	受験活動	× ↘					㉑	対講義	期待感	↗			
④			学業自体	× ↗					㉒		学力への自信	↘			
⑤			クラブ・クラス活動	× ↗					㉓		出席意欲	↗			
⑥			交友	× ↗				㉔	専門準備意欲	× ↗					
⑦			人生観確立	× ↗				㉕	対教官交流意欲	↘					
⑧		遊び	× ↗				㉖	サークル関与意欲(同)	(↗) ↗						
⑨		大学進学目的の明確度	× ↘				㉗	友人獲得意欲	巾	↗					
⑩	所属満足感	大学	↗				㉘		積極度	× ↗					
⑪		学部	↗				㉙	下宿寮	交流意欲	× ↘					
⑫		学科	↗				㉚		適応予想	× × ↗					
⑬		転学(部・科)志同	↗				㉛	対家族	交流意欲	× ↘					
⑭	地域への満足感	↗				㉜	適応予想		× × ↘						
⑮	生き方人生指針	考える時間	↗				㉝	全体的適応予想		↗					
⑯		確立感	↗				㉞	卒後進路明確度		× ↘					
⑰		生活の肯定度	× ↘												
⑱		生きがい・充実感	× × ↗												

注 1. ↗ P<.10のコホート間差あり, ↘ 両端のコホート間でのみ差あり, × P>.10
 2. 上向は適応的・積極的方向へ, 下向は非適応的・消極的方向への変化。

しながら C-59 の特質を総括したい。

1) 高校期の生活体制

「クラブ」「交友」「人生観探索」「遊び・趣味」といったインフォーマル局面の主要活動に対して C-59 は従前の学生よりも関与度を強め(表 4 ③~⑧), それら活動領域での『不全感』も減少する(表 5 ⑧)。生活空間構造における自我中核一周辺性を検討すると, 「人生観・読書」は中核化が進み, 「交友」は C-54 の水準には及ばぬものの他コホートよりも中核化して, 「クラブ」も, C-54・C-55 で一旦周辺化したのが C-52 における中核性の程度にまで回復している, というように, インフォーマル諸活動の自我中核性が進行していると見てよい。反面でフォーマル局面については, 高校制度の中枢的 pivotal な目標と考えられる「学業自体」は, それへの関与度こそ強まったもののむしろ自我周辺化し, 学業領域での『義務感』(圧迫感)も低下するというように, 軽い領域と化した。しかし, 『不全感』は C-54 や C-55 より増え旧制度下の学生の水準に戻る傾向をみせるから, 全体的には軽い領域になったとはいえ「やり残し感」や「軽さ」への後悔感をもつ層も増えつつあると言えよう(表 5 ⑧)。一方「受験準備活動」では, それへの関与度(表 4 ③)は不変だが, 『最も力』即ち自我中核性は, C-54 をピークに低下しつつも依然 C-52 より強く, 『義務的』も『最も力』に平行した推移を示す。反面, 『不全感』は C-52 以降一貫した増大

表5 コホート間の推移の概略 —自由記述式・選択式項目—

項目・カテゴリー		推移の概略				項目・カテゴリー		推移の概略				
		年 度						年 度				
		52	54	55	59			52	54	55	59	
① 進学目的	職業・資格	×				自 校 我 中 核 的 活 動 展 望	⑧ 高 学 自 体	受験 準備活動	最も力			
② 当 初 志 望 先	大 学	弘 前 大 学							不全感			
		旧 1 期 校						義務的				
	学 部	現所属と同じ					最も力					
		同 系					不全感					
学 科	現所属と同じ	同 系					義務的					
		異 系					最も力					
③ 当 初 志 望 の 動 機	学 部	職業・資格	×				不全感					
		(志望専攻あり +適性)	×				最も力					
	学 科	職業・資格 適性	×				不全感					
④ 現 所 属 選 択 動 機	職業・資格						⑨ 現 在 展 望	⑩ 1 年 次	交友	最も力	×	
	学力を考えて					不全感				×		
	性格・適性					義務的			×			
	やりたい事がやれそう					(学業+出席行動)		×				
	家から近い					交友		×				
⑤ 卒 後 志 望 路	大学院進学					⑪ 学 部 期	出席・試験 学 業	交友	最も力			
	就職								出席・試験			
⑥ 自 我 中 核 的 準 拠 集 団	未 定					出席・試験 学 業	交友	交友	最も力			
	家 族	高校期の友人	×						出席・試験			
		大学での 友 人	クラブ	×			(なし+NA)	×				
			クラブ外	×			(就職+学業)					
計		×			出席・試験							
⑦ 準 拠 集 団 の 中 核 的 活 動	学 業		×			注 1. 表4の注1に同じ。 2. 上向は増大。下向は減少。	出席・試験 学 業	交友	最も力			
	対人関係自体		×	×					出席・試験			
	クラブ活動自体		×						(なし+NA)	×		
	(遊び + 趣味)		×									

傾向を見せる。つまり受験準備活動は重い領域と化しつつも、そこから感じる拘束感・圧迫感
C-52 の水準に回帰したのである。

以上要するに、インフォーマル領域の自我中核化、学業自体の自我周辺化、受験準備活動から
の圧迫感を欠いた不全感とその比重の強まり、が C-59 の特質と見られる。

2) 高校生活への全体的評価

受験準備の比重とそれへの不全感とが強まったことと平行して「余裕感」(表4①)も新制度導入(C-54)以後悪化をみせるが、それにもかかわらず「満足感」(同②)は一貫した好転を示している。より自我中核化したインフォーマル領域からの支えが満足感をおし上げているのかもしれない。

3) 進学進路決定過程と所属満足感

大卒後の志望進路として「就職」をあげる者が増え、大学進学に当っては当初志望先の志望動機としても現所属選択動機としても「職業・資格」重視者、及び専攻への「興味・適性」重視者が増え、更に、「学力」による進路規制が強まっている。逆に、「家から近い」「まちにひかれて」といった周縁的動機による現所属選択者や、現所属選択動機の不明確な者は減少傾向を辿る(表5①~⑤)。即ち将来の就職を見越しつつ職業や資格への有利さを重視し、他方では、専攻や適性を重視し、学力による規制をうけながら入学してくる学生が増大したのであり、これらのいわば現実的動機が進学進路決定過程に強く影響するようになったのに対して、周縁的あるいは非現実的動機による選択は減少したのである。医学部を除き博士課程をもたず、研究者として大学院修了者を送り出す基盤も弱い旧2期地方大学としての弘前大学にあっては、大学院志望者の減少¹³⁾(同⑤)もまた非現実的動機の減少という文脈で理解できる。

かくて第一志望での入学者が増え(表5②)「所属満足感」も尽く向上した(表4⑩~⑬)。所属満足感の改善は特に学部・学科について顕著である。表5②からは新入試制度導入期には増大傾向をとった「異系」学部志望からの鞍替え¹⁴⁾層の著しい減少と、学科レベルでも第一志望入学者の著しい増大が見出されるし、更に、〈志望学部の選定→学力にみあう大学の選定〉という決定過程を示唆する「他の国立大」からの志望がえ者のC-59における増大も認められるが、これらは全て〈専攻・適性〉重視の所産と解される。

4) 人生観・人生指針

高校期の「人生観探索」行動が自我中核化し(表5⑤,表4⑦)、入学後の「考える時間」「確立感」も強まる(表④⑬⑯)が、現在及び1年次の「最も力」では減少する(表5⑨⑩)。入学以前に、ということは即ち、進路観を内容とするのであろう人生観や生き方は早々と確立され、入学後の再吟味や深化への構えが弱まったとみられる。

5) 大学生活のフォーマル・インフォーマル諸局面への係わり意欲

フォーマル局面：教養講義への「期待」や「出席意欲」は向上した(表4⑳㉓)。しかし出席行動・単位取得それ自体を自我中核的に定位あるいは追求する構えを示す者は減少し(表5⑨~⑪)、出席や単位へのとらわれから解放されつつあるかに見える。他方「学力への自信」(表4㉔)はC-55で最も良好でのち低下し、大学の講義に対する不安感が高まっていると解される。

入学直後現在「学業」を自我中核的に定位する者は減少し、今後の1年間に自我中核的に追求しようとする者の推移は波動的ながらC-59はC-52の水準を維持する(表5⑦⑨⑩)。それに対して学部期には学業を自我中核的に定位したり展望する層はC-59ではじめて明確に増大し(同⑪)、かつ「専門準備意欲」(表4㉔)も高まっている。従って、現在については自我周辺化し、

学部期については自我中核化を図っているとまとめることができよう。そして、学業～講義一般、特に、専攻学業への期待が高まったと考えられ、この点は、先にのべた〈専攻・適性〉重視と符合するものである。

インフォーマル局面：「サークル関与意欲」「友人獲得意欲」は向上し、インフォーマル局面への意欲の強まりが観察される（表4㉔～㉕）。

「現在」及び「1年次」の「自我中核的活動」で「クラブ」等の自治的集団活動の増大が見出される（表5㉑㉒）とおり、クラブ活動は自我中核化しているが、しかしその焦点は、クラブ活動それ自体にはなく対人関係にあることが「準拠集団での中核的活動」（同㉑）から示唆される。とはいえクラブ関係以外の「大学での友人」に強く準拠する者は減少し（同）、現在「交友」を自我中核的に定位している者も減る（同㉑）。少なくとも現在においては、交友の自我中核性は低下しているのである。尤も将来展望においては、「展望—1年次」（同㉑）の「交友」は波動的推移をとりながらもC-52・C-55よりも増えており、従って、今後の1年間は交友を自我中核的に追求しようという構え（期待）は強まった。だが、学部期への展望では、交友もクラブも一切コホート間差をみせない（同㉑）。

フォーマル・インフォーマルの比重：教養部期は交友を焦点とするインフォーマル活動を追求し、学部期には専攻学業を追求しよう、とする『わりきり』の構えの強まりを指摘できる。これはC-52とC-54の入学後1年間の適応過程を比較してC-54の特徴として見出された現象である（豊嶋ほか 1981）から、共通一次生に広く認められる傾向と思われる。

6) 生活体制全般

「SA」（表4-㉑）はC-54で著しい改善をみせた後徐々に低下しているものの、依然C-52よりも良好な水準を保ち、「全体的適応予想」（同㉑）もC-54以降、C-52よりも良好な水準にあって「生きがい・充実感」（同㉑）も向上する、というように、トータルな人格適応感改善されていると見てよい。前出のように大学生生活のフォーマル・インフォーマルな主要活動への関与意欲も全般に強まったから意欲の面での向上も見出される。更にSAと「全体的適応予想」との間の差が次第に開き¹⁴⁾、現在よりも一層適応的な将来を展望する傾向も強まったといえよう。こうした適応感の良さや意欲の向上は広島大学・山形大学・福岡教育大学・京都工芸繊維大学からも報告されており（上地ほか 1982, 1983. 末広 1980. 鶴 1980. 鳥山 1982）、新制度導入後の学生に広汎に共通する特質と思われる。

SAと他の評定項目との関連をみると表6の通りである。「高校生活満足感」「大学満足感」「友人獲得意欲（積極性）」「学業意欲」「下宿・寮適応予想」との間の相関係数の推移から、これらの領域がトータルな人格適応感に与える影響が強まったと示唆される。しかし「地域満足感」は逆に相関係数が低下しており、地域（弘前に来た・残った事）への満足感の高まり（表4㉒）はSAの改善に寄与してはならず弘前〈大学〉に入れた事への満足感（強いて言えばともかく大学に入れた満足感）がSAの改善に強く寄与しているのであろう。

また生活体制全般に関して次の三つの特質が指摘できよう。第1は既述のように高校期及び大学期双方でのインフォーマルな諸活動の自我中核化である。第2は、「高校期」及び「現在」の『最

表6 総合的適応感 (SA) との相関係数の比較

項目名称		C-52		C-54		C-55		C-59		比較 -t値-		
		n	r	n	r	n	r	n	r	C-52 : C-59	C-54 : C-59	C-55 : C-59
高校生活 全体	余裕感	684	(073)	720	(058)	765	108	789	165	1.78*(+)	2.10*(+)	—
	満足感	680	116	720	162	765	202	791	206	1.76*(+)	—	—
大学満足感		685	328	718	323	765	322	792	433	2.35*(+)	2.49*(+)	2.55*(+)
地域への満足感		687	304	716	236	765	231	785	276	—	—	-2.29*(-)
生き方	考える時間	689	(035)	720	(016)	767	079	792	(-037)	—	—	—
人生指針	生活肯定度	×		245	397	348	335	381	386		—	—
生きがい・充実感		×		×		764	534	790	566			—
学業一般への意欲		×		717	158	765	127	791	210		—	1.68*(+)
友人獲得一積極度		×		719	096	764	113	790	204		2.14*(+)	1.84*(+)
下宿・寮適応予想		×		×		593	432	623	504			2.32*(+)
全体的適応予想		682	321	718	446	766	415	791	405	1.85*(+)	—	—

注 比較結果が $p < .10$, 又は, $r > .300$ の項目のみ表示。

・r 欄 小数点は省略。()は $p < .05$, ゴジックは $r > .300$

・比較欄 - $p > .10$, ・ $p < .10$, * $p < .05$ 。(+)はrの上昇, (-)は下降。

も力』で「なし+NA」が増加傾向をとるのに対して「展望-1年次」「学部期」ではC-55をピークに減少しつつある事(表5⑧~⑩)から示唆される, 過去及び現在における自我中核の活動の欠落傾向と将来展望の水準での中核定位意欲の強まりである。第3は, 地元入学者の構成比は減少傾向を示す¹⁵⁾にもかかわらず「中核的準拠集団」で「家族」と「高校期の友人」が増え「大学での友人」が減少傾向をとる事(同⑥)から示唆される, <「家庭からの引力」(鳥山 1984)及び高校期からの引力>(豊嶋 1985)の強まりである。

II-3 大学教育・学生相談の課題

ここでは上でまとめられたC-59の特質の中から学生の発達・成長にとっての内的阻害要因あるいは問題点と見做せるものを取り出した上で, 大学教育や学生相談にとっての課題を考察していく。

問題点の第1は, 高校生活満足感に関してである。受験準備活動の比重や進学進路選択に際する学力による規制が強まり余裕感も低下傾向にあるにもかかわらず, 満足感が次第に強まっているのは何故だろうか。勿論, 進学進路選択に当って適性重視傾向も見出されたが, C-59から導入した「適性と偏差値のウェイト」を問う設問には全体的に偏差値に傾く反応がえられている¹⁶⁾から, 受験や学力偏差値からの圧の強まりは否めない。しかし他方, 余裕感の低下は余裕・切迫両群の減と中間群の増を内容とし切迫感むしろ弱まりを示す¹⁷⁾。つまり受験や学力からの圧が強まった現実を当然視した同調や, 切迫感の認知回避が背景にあってそれが満足感をおし上げる1要因となっているのであろう。かかる状況順応的構えの強まりは他大学の学生相談カウンセラーからも報告されている(下田 1982)。しかし青年期の発達課題は社会的諸圧への対峙と受け留めを経た, 統合としての社会的自立にありうし, 更に変動する大社会に組織・集団が適応していくには成員の従属 conformityではなく創造的個人主義 creative individualism が要求される(Schein,

1977)としたら、状況順応の前に、状況への否定的感情の意識化をも含めた自己・環境の認知～理解がまず必要となろうし、次にかかる主観的世界を表出し深い承認 recognition を得ることを通して自己実現欲求を動機づける、という過程が学生に望まれることになる。そしてこの過程がカウンセリングによる成長の本質(福井 1980)であるとすれば、満足度の良好な学生層に対するカウンセリング関係の提供が大学にとって最大の課題になろう。副次的に、大学の正課の教育の中で、学業を辿る否定的感情をも表出できるような面対面的指導と、外的圧として与えられることになる専攻学業への創造的取りくみを引き出す指導方法を検討する事も教官組織の課題となる。

第2の問題点は進学進路決定過程における〈職業・資格〉志向と〈専攻への興味・過性〉重視に関してである。この強まりは大学にとって好ましいかに見える。しかし表5にみる通り大学進路目的と卒後進路展望の明確度は不変という事実からして、進路選択の規準としての職業観・適性観は深い吟味・探索による確信をではなく好み preference や有利さを内実とする危険性がある。更に、進路選択期までに職業や専攻学業の現実が認知されていたとは考えにくく、事実、C-54の1年間の適応過程の予測要因の分析(豊嶋ほか 1982)によれば、専攻への関心を重視した入学者で1年次に既にSAを悪化させていく層が存在することが見出されている。それ故C-59のかかる特質は逆に吟味不足のままの進路選択者の増大を示唆しており、大学生としての同一性や職業的同一性の危機が入学後あるいは卒業後に訪れる危険性を孕む。これへの大学の対応は、喜多村(1982)の指摘した“大学側が高校生(潜在的な学生)に対して積極的に情報提供とカウンセリングを行なうこと”に加え、入学後の専攻進路一就職進路に関する相談体制、即ち大学における進路相談 career counseling 体制を構築することであろう。原理的に大学制度の社会化目標は、研究への社会化とともに成人期職業社会への社会化にある筈だから、特に後者が最大の課題となる。

第3は〈家族と高校期からの引力〉の強まりと〈人生指針の入学前の確立一入学後の探索意欲の欠如〉に関してである。“親離脱”(辻 1978)が発達課題となる青年期後期に家族への準拠が強まり、成人期に向けた将来展望の構築が要請されるこの時期に過去の対人関係への準拠が強まるのは退行的でさえあろう。しかも家族への準拠とは家族、就中その中核としての親のもつ価値規準への準拠を意味し、換言すれば親の権威への服従ということになろう。前述した学力という「新たな権威 new authority」(Toyoshima et al. 1984)への従属の強まりと併わせるとC-59における権威への従属の強まりが浮び上がる。他方において人生指針の早期の確立傾向と入学後の深化意欲の欠如傾向も見出させ、しかも既述の如く、吟味を欠くと思われる職業観・適性観に基づく進路決定への傾斜も見出される。これらが指し示すのは早期完了 foreclosure 傾向の強まりである。この傾向はC-52・C-54・C-55の大学4年間の追跡資料のコホート分析でC-54・C-55の特質としてToyoshima et al. (1984)が見出したものだが、それがC-59では入学直後時点で指摘できるのである。従ってC-59は、C-52が辿った〈入学後の人生指針崩壊→一年次後半での再確立〉という過程を欠くC-54・C-55と同様の轍を踏む可能性をもつ(図1)。クライシスを経て選択した、社会的にプラスの生き方と役割への傾倒が発達課題としての肯定的な同一性達成であるとするれば、先ず、彼等が親・学力・過去の対人関係からより広い対人関係とより普遍的な価値へと準拠がえするための資源一例えばサークルを含む自治的集団活動や学業それ自体を十分に展開でき

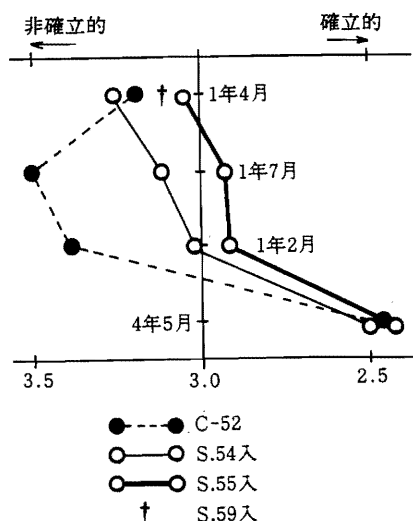


図1 「人生指針確立感」における
平均値の大学4年間での変容

る場と制度的保証一を大学が提供することが要請されるし、次に、生き方・進路観を巡る潜在的葛藤を表面化させて“積極的モラトリアム”（加藤 1983）を迎えさせつつ支えていくカウンセリング的対応が必要となろう。後者の方途として、多様な人生観進路観を持つメンバーにより人生観・進路観それ自体に焦点をあてたグループ・アプローチ、即ち「社会的展望や価値志向の再編成」（安藤 1977）をめざすグループ・アプローチが考えられる。

第4は高校期及び現在での自我中核的活動を欠く者の増大に関してである。将来展望の水準では逆に何らかの自我中核的活動を定位し追求しようとする者が増えてはいる。しかし、SAと「今後の適応予想」の乖離傾向は適応的未来を空想しているに過ぎぬ可能性を示唆し、将来展望水準での自我中核的活動追求への意欲も空想に留まる危険をもつ。更に、過去・現在において生活空間構造の中核部を限定しなかった者に、近未来において限定するという構えの転換が容易に可能かという問題も加わる。いずれにせよ少なくとも現在までは、限定できぬ、又は限定を回避する傾向が強まったのであり、教養部期を学業からのモラトリアム期・インフォーマル活動期として把える傾向の強まりと併わせ、同一性拡散あるいはモラトリアムへの傾斜も強まったと言えよう。勿論ここでいうモラトリアムは良好なSAからも窺えるように、クライシスの渦中としてのそれではなく安住の地位としての消極的モラトリアムになる。これへの大学教育・学生相談の対応としては、繰り返しになるが、葛藤の意識化を経た積極的モラトリアムへの転換に向けて刺激を与え支えていくことになるであろう。

第5は、高校期・現在・1年次の展望のいずれにおいても学業の自我周辺化が依然見出されている点である。学部期展望の水準では逆に中核化が進行しているとはいえ、高校期から教養部期を通して周辺化していた学業との係わりの中で形成されるスキルで、専攻学業に適応していけるのか疑わしい。事実、「講義への学力」に関する自信（適応予想）は強まってはいるがC-54との間では低下さえ見せるのである（表4㉒）。加えて、学部への移籍後、『わりきり』を成功させ短期

間で専攻学業を生活空間構造の中核に定位する体制がえが可能か、という問題も生ずる。学生にとっての発達課題である学業との間の適応を促進させるためには、まず教養部段階で、マークシート対策としての学習からの転換を含め、学業との係わりの改善を促すシステムティックな取り組みが要請されるし、学部段階では、研究を自らの自我中核的領域に定位しているであろう教官が学生のモデルとして機能しうるように、教官が学生とのフォーマル・インフォーマルな交流を展開していくこと、かかる交流を通して人としての教官を学生の中核領域に析出させ、それを媒介に学業を中核化させていくこと、が期待される。学部研究室単位による、教官を含む合宿等のグループ・アプローチはその方法の1つとなろう。

第6はクラブ活動や交友領域の自我中核性の問題である。クラブ領域の中心が活動それ自体よりもむしろ対人関係におかれている事は、クラブ活動が生む“挑戦・創造価値”（小野 1982）の内化を困難にするであろう。他方、交友・対人関係自体に関しても、波動的推移の中で増大傾向を見せた「自我中核的活動—交友」（表5⑧⑩）への今後の係わり方が問われてくる。というのは、C-54・C-55 とともに、4年次においては対人関係一般の C-52 に比べた稀薄化と狭まりが認められる（Toyoshima et al. 1984）からである。クラブと交友が自我中核化しているにもかかわらず、発達課題としての挑戦・創造価値も、対人関係の広がりや深まりもえられにくい帰結になる事態を予防するには、第1に、深いレベルでの相互受容を伴う学生間の対人関係とそれへのスキルを開発して、それを契機として挑戦・創造価値の内発をはかる企画が有効であろう。例えば、入学後早い時期における友人作りグループ、同じ悩みをもつ者との出会いによる「普遍的広がりをもつ同質性」（辻 1978）発見を獲得目標とするグループ、クラブ単位でのグループ、ベーシック・エンカウンター・グループなど、学生相談機関による様々なグループ・アプローチを学生のニーズにあわせて展開していく事である。第2は、挑戦—創造価値を直接刺激するアプローチであり、例えば創造性研修合宿¹⁹⁾のような構造化されたグループ・アプローチや、正課教育において学生の共同研究を促すことなど、挑戦—創造を目標とする対人関係を準備する事である。

要 約

以上本論では、国公立大学入試制度の大幅な変動をはさむ8年間の新入生コホートから4コホートを選定した入学直後調査の資料をコホート間で比較することによって、入試制度定着期の新入生（C-59）の人格適応の特質がさぐられた。その総括がII-2章であるが、ここで要約すれば、受験準備活動の比重の強まり、高校期の回顧と大学生活への展望の両水準におけるインフォーマル活動の自我中核化・学業の周辺化・良好な満足感や人格適応感、職業と専攻適性をより重視した進学進路決定、人生観確立度の強まり、などがあげられる。しかしこれらの多くはいわばC-59の陽画であり、その背景には、状況順応、職業観・適性観の吟味不足、親離脱の不全と早期完了への傾斜、消極的モラトリアム乃至は同一性拡散への傾向、挑戦—創造価値の内化不全と浅くなった対人関係、といった危険性や問題がひそむ事をII-3章で指摘し、更に、良好な適応感を抱く層に対するカウンセリング関係の提供や様々なグループ・アプローチの設計等学生相談機関に課せられる課題と、正課の教育に要請される諸課題が考察された。

今回と同様の分析と考察を、高等学校教育課程の改訂を経て入学して来る C-60 や、現在検討中の国公立大学入試制度の再改訂後のコホートを対象にして展開することが我々の今後の課題となる。

註

- 1) 大学生の自我同一性地位に関する研究(例えば無藤 1979, 加藤 1983)や、『全国学生相談研究会議』における共通一次学生の大数的・臨床的特質を探索する4年間のとりくみ(全国学生相談研究会議 1980~1983, この総括は下田によって試みられている。), 慶応義塾大学産業研究所の大学生の自我同一性確立過程と大学への社会化に関する追跡研究(南ほか 1977, 1980, 西河ほか 1983)などが貴重な例外であろうが、しかし、最後者を除き統合的接近とは評しにくい。
- 2) 大学における社会化過程の初期と終期という意味で1年次と卒業年次に焦点があてられた。
- 3) 2年次・3年次に関しては昭和55年度入学生の1部の者を対象として、本研究プロジェクトのための予備調査が実施されている。その総括は豊嶋ほか(1984b)を参照されたい。
- 4) 勿論ノーマティブ・スタディとしては前回プロジェクト第1報の如き全体集計では不十分で、学生の場合は、学部別・性別といった形式的な階層化と、そして更に、寮生か否か、卒論制度の有無、専門職養成学科か研究者養成学科かサラリーマン養成学科か、といった実質的な階層化によるノーマティブ・スタディが必須となろう。
- 5) 峰松(1981)も自己実現と自我同一性達成について注意を突起しているように、発達課題にせよ成長の内容にせよ文化や時代によって異なるであろう。例えば、リフトンのいうプロテウス的人間が生き残れる社会では同一性達成は発達課題としての意義を弱めるし、「モラトリアム時代」(小此木 1981)でも同様になる。それ故ここでは同一性の達成も含め現代の発達心理学が提示している“発達課題”の達成をさし当って「発達・成長」を見做す、という意味で〈措〉定の語を用いた。
- 6) 昭和52年度の入学直後質問紙は豊嶋ほか(1980)の文末資料の通り。
- 7) 昭和52年度生と54年度生の入学直後データの詳細な比較検討は豊嶋ほか(1981)が実施済みである。
- 8) これまで「自我関与的活動」との名称を与えていた“力を入れたこと”に関する設問の名称を本稿から変更した。五段階評定項目での「関与度」を問う設問群への名称との混同を避けるためである。これに伴って、これまで“かけがえのない人間関係でのかけがえのない活動”の略称・「自我中核的活動」を「準拠集団での中核的活動」(表3⑦)と改称した。
- 9) C-52では自由記述反応で当該カテゴリーに属する記述が中心だった者をそこに分類し、C-54以降では、C-52の反応分類に使用したカテゴリーに基き選択肢を構成して一肢選択させた。従って厳密には比較不能だが、標本レベルで10%以上のちがいをみせるし、関連設問である「現所属選択動機」の類似選択肢では有意な増加が認められるから増えたと見做す。
- 10) 就職への準備と専攻予定学業への準備とから合成されたカテゴリー。教養部生にとってはいずれも生活空間構造における“遠い未来”水準の課題なので一括したが、前者は各コホートとも4~5%程度。この合成カテゴリーで見出された差は「学業」における変化に帰せられる。
- 11) 記述された学部・学科が文系・理系・技術(技能)系のいずれに属するかによって、「系」の異同を判断した。
- 12) 「自我中核的活動一現在」における「学業+出席」を「学業」と「出席」に分けるとC-54・C-55・C-59の順で、「学業」は9.6%・5.5%・5.6%、「出席」は1.7%・0.9%・0.6%。前者はC-54とC-55・C-59の間に、後者はC-54とC-59の間に差が認められる。
- 13) 医学部生では増加。他の理系学部での減少が著しい。
- 14) C-52はn.s., C-54とC-55では $p < .01$, C-59は $p < .001$ 。いずれもSAの方が不良。
- 15) C-52から順に42.6, 48.2, 42.4, 42.2%。C-52:C-59, C-54:C-55, C-54:C-59で差あり(全て

p<.05)。

- 16) 付一資料の項目番号14。適性重視ほど低得点を与えて平均値が3.07。
- 17) 余裕群はC-52から順に54.0, 49.5, 53.1, 41.6%。中間群22.4, 35.4, 25.4, 39.9%。切迫群23.5, 15.2, 21.6, 18.0%。
- 18) 東北大学学生相談所による「創造性セミナー」や筑波大学保健管理センターによる「創造性開発研修会」などがその好例であろう。

文 献

1. 安倍淳吉 1969, 社会心理学研究法 北村・安倍・黒田編「心理学研究法」誠信書房, 463-493.
2. 安藤延男 1977, グループ・アプローチの基礎 佐治・石郷岡・上里編「グループ・アプローチ」誠信書房, 13-33.
3. Astin, A. W. 1970, The methodology of research on college impact : part one *Sociology of Education* 43, 223-254.
4. 福井康之 1980, 「青年期の不安と成長—自己実現への道」有斐閣.
5. 星野 命 1984, 現代日本の若者の経験と動向をめぐって—青年心理学はどうかかわるか 青年心理 43, 40-52.
6. 石井完一郎 1981, 現代の若者における意欲減退とシラケをかえりみて 石井・笠原編「現代のエスプリ 168: スチューデント・アバシー」至文堂, 221-231.
7. 加藤 厚 1983, 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究 31 (4), 292-302.
8. 喜多村和之 1983, 学生集団の意識と行動の変化—日米比較の観点から 第16回学生相談研究会議・学生相談広島シンポジウム報告書 (広島大学), 35-38.
9. Marcia, J. E. 1966, Development and validation of ego identity status *Journal of Personality and Social Psychology* 3(5), 551-558.
10. 南 隆男・若林 満・佐野勝男・曾根佐紀子 1977, わが国大学組織における学生の「自我同一性確立過程」の長期的追跡研究—予備報告1 組織行動研究 1 (慶応義塾大学産業研究所), 5-38.
11. 南 隆男・若林 満・西河正行・小林ポオル 1980, 大学組織における学生の自我同一性確立過程—総合的継続的分析にむけての覚え書き— 哲学 71 (慶応義塾大学三田哲学会), 97-162.
12. 峰松 修 1981, 自我同一性と精神分裂病者の援助 遠藤編「アイデンティティの心理学」ナカニシヤ出版, 265-285.
13. 無藤清子 1979, 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究 27(3), 28-37.
14. 西河正行, 佐野勝男 1983, 大学生活は学生のキャリア発達にどのように影響を与えているのか—新入学生の大学組織への適応・同化過程の継時的分析をととして— 哲学 77 (前掲), 149-184.
15. 小此木啓吾 1981, 「モラトリアム人間の時代」(中公文庫) 中央公論社.
16. 小野直広 1982, 社会化—その屈折 原谷・安藤編『青春からの出発—人間解放への青年心理学』アカデミア出版会, 81-96.
17. Schein, E. H. 1977, “*Organizational Psychology* (2 ed.)” Prentice-Hall.
18. 清 俊夫・豊嶋秋彦・芳野晴男 1984, 大学生の組織的社会化に関する社会心理学的研究—新入試制度に伴う4年次学生の同化と変異の諸相 弘前大学教育学部紀要 51, 19-32.
19. 下田節夫 1983, 共通一次学生の問題 第16回学生相談研究会議・学生相談広島シンポジウム報告書 (前掲), 109-113.
20. 末広晃二 1980, 指定討論—共通一次元年における大学入学生の動向 第13回学生相談研究会議・学生相談名古屋シンポジウム報告書 (名古屋大学), 26-27.
21. 鳥山平三 1982, 現代学生の自我構造と価値志向 第15回学生相談研究会議・学生相談筑波シンポ

- ジウム報告書（筑波大学），38-43.
22. 同 上 1984, これからの学生への教育的関わり方と大学教育に望むこと 第17回学生相談研究会議・学生相談江の島シンポジウム報告書（東京工業大学），79-83.
 23. 豊嶋秋彦 1980, 入試制度の変容前後における大学新入生の適応状況 第13回学生相談研究会議・学生相談名古屋シンポジウム報告書（前掲），11-14.
 24. 同 上 1984 a, 新入試制度下の学生像と大学教育・学生相談 第17回学生相談研究会議・学生相談江の島シンポジウム報告書（前掲），83-88.
 25. 同 上 1984 b, 大学生の適応過程における社会化の問題 第22回全国大学保健管理研究集会東北地方研究集会報告書 12-13.
 26. 豊嶋秋彦 1985, 『新入試制度下の学生像』再考 第18回学生相談研究会議・学生相談三河シンポジウム報告書（愛知教育大学）（印刷中）.
 27. 豊嶋秋彦・清 俊夫 1978, 社会心理学の課題と接近法—理論的ならびに実践的 Relevance をめぐって— 年報社会心理学 19, 41-53.
 28. 豊嶋秋彦・清 俊夫・芳野晴男 1979, 大学新入生における適応状況と適応過程—昭和52年度入学者に対する追跡的研究— 弘前大学保健管理概要 4, 161-208.
 29. 同 上 1980, 大学新入生における適応状況と適応過程（II）—共通出席者における適応の状況と適応の予測因をめぐって— 弘前大学保健管理概要 5—別冊, 1-51.
 30. 同 上 1981, 大学新入生における適応状況と適応過程（III）—入試制度改訂に伴う適応の変容と同化の諸相—弘前大学保健管理概要 5, 1-41.
 31. 同 上 1982, 大学新入生における適応状況と適応過程（IV）—入試制度改訂後における4月から7・2月に至る適応過程の予測因 弘前大学保健管理概要 6, 1-50.
 32. 豊嶋秋彦・清 俊夫 1983 a, 新入試制度に伴う4年次学生の適応の変容と同化の諸相 第16回学生相談研究会議・学生相談広島シンポジウム報告書（前掲），29-34.
 33. 豊嶋秋彦・芳野晴男・清 俊夫 1983 b, 大学新入生における適応状況と適応過程（V）—入試制度改訂後における7月から2月に至る適応過程の予測因 弘前大学保健管理概要 7, 1-41.
 34. 豊嶋秋彦・清 俊夫・芳野晴男 1984 a, 大学生の適応構造に関する長期的追跡研究—入学時・教養部終了時・4年次における人格適応の構造 弘前大学保健管理概要 8（1）, 1-45.
 35. 豊嶋秋彦・芳野晴男・清 俊夫 1984 b, 大学生の適応過程に関する総合的検討—（1）1年次～4年次適応感の入学時点における関連要因 東北心理学研究 34（印刷中）.
 36. Toyoshima, A., Sei, T., & Yoshino, H. 1981, A study on predictors of adjustment process in Japanese university freshmen *Tohoku Psychological Folia* 40, 51-65.
 37. op. cit. 1984, A Socialpsychological study on the college socialization before and after the nationwide change of the entrant selection system *Tohoku Psychological Folia* 43 (in press) .
 38. 辻 悟 1978, 青年期に生じやすい諸問題 高橋省己編「子どもの精神衛生」 日本文化科学社.
 39. 鶴 光代 1980, 指定討論—共通一次元年における大学入学生の動向 第13回学生相談研究会議・学生相談名古屋シンポジウム報告書（前掲），27-30.
 40. 上地安昭・中丸澄子・小柳晴生 1982, 80年代学生の適応実態 第15回学生相談研究会議・学生相談筑波シンポジウム報告書（前掲），34-37.
 41. 同 上 1983, 共通一次学生の適応実態 第16回学生相談研究会議・学生相談広島シンポジウム報告書（前掲），16-29.
 42. 山口勝弘 1982, 学生相談におけるグループ・アプローチの位置について—個人カウンセリングとグループ・アプローチの併用についての一・二の問題— 第15回学生相談研究会議・学生相談筑波シンポジウム報告書（前掲），74-77.

I. 入学以前のことについて

- 1-1) 進学することにきめたとき進学目的がはっきりしていましたか。(R)
- [1-2) どんな目的だったのですか。(F)]
2. 「できればどんな大学・学部・学科に進学したい」と思っていたのですか。また、その理由を下の理由欄から、大学・学部・学科のそれぞれについて最も強いものをひとつずつ選んで番号を記入して下さい。
- 1) どの大学 (F), その理由 (C)
- 2) どの学部 (F), その理由 (C)
- 3) どの学科・課程・専攻 (F), その理由 (C)
- | | | | |
|----|---|-------------------|---------------|
| 理由 | } | ①社会的にレベルが高いから | ②家庭の条件・家に近いなど |
| | | ③職業・資格を考えて | ④教養を身につけたいから |
| | | ⑤志望の学部・学科・専攻があるから | ⑥その領域への興味適性 |
| | | ⑦とくに理由はない | ⑧その他 |
| | | | |
3. ここ数年間、次のような活動にどのくらい力をいれてきましたか。(全てR)
- 1) 受験勉強や進学に関する活動 2) 勉学・授業そのもの
- 3) クラブ・サークル・クラス活動 4) 交友関係
- 5) 生き方・考え方など、人生観・人生指針に関すること 6) 遊び・趣味
4. それでは高校時代(浪人時代も含む)、一番力をいれたことは何ですか。なければ「なし」と記入。(F)
5. 力をいれたかったのに、できなかったことは何ですか。なければ「なし」。(F)
6. やりたくなかったのに、やらざるをえなかったことは何ですか。なければ「なし」。(F)
7. 大学にはいったら是非やりたいと思っていたことは何ですか。なければ「なし」。(F)
8. あなたの高校生活(浪人生活も含む)を全体として評価して下さい。(R)
- 1) 余裕感 2) 満足感

II. 生き方・人生指針などについて

9. これまで、人生観・人生指針や、自分なりの生き方・考え方など、生きる指針となるものについて考える時間がとれましたか。(R)
10. それでは、そうした指針をすでに作りあげていると思いますか。(R)
- [補] それにてらしてみると、今の生活は納得のいくものですか。(R)]
11. 自分の性格や行動の仕方(行動傾向)を含め、「自分がどういう人間であるか」を、これまで『かえり見』ることができましたか。(R)
12. 『かえり見』た結果、そういう自分が好きですか。(R)

III. 入学のこと・現在のことについて

13. この大学・学部・学科を選んだ理由は何ですか。あてはまるすべてに○をつけて下さい。(C)
- | | | |
|---|-----------------------|------------------------|
| } | ①自分の学力で合格できそうだとしたこと | ②自分の性格・適性にあっていそうだとしたこと |
| | ③将来の志望職業にふさわしいということ | ④自分のやりたいことができそうだとしたこと |
| | ⑤家から近いから | ⑥弘前の街や土地柄にひかれて |
| | ⑦親や先生からすすめられたり指導されたから | ⑧国立大学なので |
| | ⑨とくにこれといって重視したことはない | ⑩その他 |
| | | |
14. この大学・学部・学科を選ぶのに「偏差値」と自分の「興味・適性」のどちらにウエイトをおきましたか。(R)

15. この大学・学部・学科に入ったことについて。
 1) 弘前大学に入学したことを、今どう思っていますか。(R)
 2) 今の学部に入ったことについては。(R) 3) 今の学科(専攻・課程)については。(R)
 [4) もし不満がある場合、どういう点ですか。(F)]
16. 今、他の大学・学部・学科に再受験や転学部・科したいと思いますか。(R)
17. 弘前という街に来て(残って)どう思いますか。(R)
18. あなたの高校から同期で弘前大学に入学した人数はどのくらいですか。(C)
 {①1人だけ, ②2~5人ぐらい, ③6~10ぐらい, ④11~30人ぐらい, ⑤30人以上}
19. 今、この大学に友人はいますか。あてはまるものすべてに○をつけて下さい。(C)
 {①親友といえる人がいる, ②気がねなく話しあえる人がいる, ③遊び友達はある, }
 {④あったらしゃべる程度の人はいらぬ, ⑤友人はまったくいない }
20. 今、一番力をいれていることは何ですか。なければ「なし」。(F)
21. あなたにとって今、最もかけがえのない人間関係は何ですか。ひとつだけ選んで下さい。(C)
 {①家族との関係 ②高校(中学・浪人時代)の友人関係 }
 {③サークル・クラブ・寮以外の大学での友人関係 ④サークル・クラブ・寮での対人関係 }
 {⑤尊敬する人や師との関係 ⑥恋人や異性との関係 ⑦とくになし ⑧その他 }
22. そこでの最もかけがえのない活動は何ですか。ひとつだけ選んでください。(C)
 {①勉学・研究活動 ②サークル・クラブ・クラス・寮の活動そのもの }
 {③趣味の活動 ④遊び・リクリエーション ⑤人生観・世界観の確立 }
 {⑥対人関係そのもの ⑦とくになし ⑧その他 }
23. 弘前大学入学が決まってからの生活の中で、生きがい感や充実感をえていますか。(R)
24. 要するに、弘前大学への入学が決まってからこれまでの生活は、全体としてうまくいっていますか。(R)
 [補-1] どういう点でうまくいっているのですか。(F) [補-2] どういう点でうまくいっていないのですか。(F) [補-3] それではどうすれば(どうなれば)うまくいくと思いますか。(F)]

IV. 今後の学生生活について

25. 学業に対する意欲は、ありますか。(R)
26. 教養部での講義を全体として予想すると、面白そうですか。(R)
27. 教養部での講義を全体として予想すると、ついていけそうですか。(R)
28. 講義への出席はどうしたいですか。(R)
29. 専門の研究やその準備を1年の時点でやりたいですか。(R)
30. 教官との交流は、もちたいですか。(R)
31. サークル・クラブ活動は、やりたいですか。(R)
32. 大学での友人について。
 1) たくさんもちたいと思いますか。(R) 2) 積極的に求めたいと思いますか。(R)
33. 上級生や先輩との交流は、求めたいですか。(R)
34. 大学での友人や上級生・先輩との関係は全体としてうまくいきそうですか。(R)
35. 家族との関係は、(R)
 1) 密にしたいですか。 2) うまくいきそうですか。
36. 自宅以外から通学している人だけが答えて下さい。下宿や寮での生活で、(R)
 1) 他の人たちとのかわりは密にしたいですか。 2) うまくいきそうですか。
37. これからの教養部生活で力をいれたいことは何ですか。力をいれたい順に書いて下さい。なければ「なし」(F)

1) 第一位 2) 第二位 3) 第三位

38. それでは、学部移籍後の生活で一番力をいれたいことは何ですか。(F)

39. これからの教養部生活は全体としてうまくいきそうですか。(R)

〔補〕 どのような点でうまくいきそうにないのですか。(F)〕

V. 卒業後の進路について

40. 卒業後の進路はすでに決めていますか (R)

41. 希望としてはどうしたいのですか。(C)

{ ①大学院進学, ②就職, ③家業, 家事につく, ④未定 }

42. 最終的にはどんな仕事がしたいのですか。(C)

{ ①専門職(医師・法曹・看護など専門的な知識・技術に基く仕事)
②研究者(大学教官を含む) ③学校の先生 ④①~③以外の公務員
⑤企業 ⑥自営業や自由業 ⑦その他 ⑧未定 }

注 1. (R) は五段階評定項目, (C) は選択式項目, (F) は自由記述式項目であることを示す。

2. { } は選択式項目での選択肢を示す。

3. [] は、一部の者にのみ設問した項目である。